

平成29年度第11回移動市長室会議録

(平成30年3月22日)

1 日 時：平成30年3月22日（木曜日）14時～15時35分

2 場 所：山家コミュニティセンター

3 出席者：

『山家岩戸神楽保存会』

森木会長、会員（10人）

『筑紫野市』

藤田市長、宮原文化情報発信課長、杉村秘書広報課長、小鹿野文化情報発信課係長、
森田秘書広報課係長、山崎秘書広報課係長、末吉秘書広報課主査

4 内 容：懇談

○（事務局） 皆様、こんにちは。本日は移動市長室ということで、大変お忙しい中に、皆様にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

ただいまから平成29年度第11回目となります通算78回の移動市長室を本日は山家岩戸神楽保存会の皆様と地域に根差した伝統文化の継承についてということで、お手元の次第のとおり始めさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日の懇談内容は、会議録を作成し、公表させていただきます。撮影した写真や動画は、市のホームページや広報紙に掲載をさせていただきますので、御了承ください。

初めに、藤田市長が皆様に御挨拶を申し上げます。

○（藤田市長） 皆さん、こんにちは。本日は、本年度11回目の、通算しますと第78回目になります移動市長室としまして、山家コミュニティ運営協議会の安武会長さん、また、山家岩戸神楽保存会の森木会長さんをはじめ、保存会の皆さんと懇談をさせていただくことになりました。年度末で何かと御多用中に、この開催に向けて御準備をいただき、まことにありがとうございます。皆様方におかれましては、日ごろから神楽の奉納と継承に御尽力をされ、長きにわたりまして伝統を守り続けておられますことに、深く敬意を表しますとともに厚く御礼を申し上げます。

山家宝満宮で毎年10月17日に奉納され、神への祈りの儀礼である山家岩戸神楽は、筑紫野市第1号の無形民俗文化財として、昭和51年4月16日に指定をされました。山家の神楽は宮座行事とセットになっていることが特徴とされ、お宮に伝わる山家宝満宮縁起は、江戸時代の寛永9年、今から380年余り前の記録が残されているところであります。また、大変古くからの歴史を再認識させていただいたところでもあります。

本日は神楽奉納をはじめとした伝統文化の継承、後進の育成などに関する皆様の活動や、その活動に対します思いをしっかりと伺いしながら懇談をさせていただき、これからの市政に生かしてまいりたいと、このように考えているところでございます。

最後までよろしくお願いを申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いをいたします。

○（事務局） 続きまして、山家岩戸神楽保存会の松原静雄さん、お願いいたします。

○（松原静雄会員） 皆様、改めまして、こんにちは。本来ならば、森木会長さんが御挨拶される場所なのですが、会長から指名されましたので、私から御挨拶させていただきます。

今日は、先ほど言われましたように78回の移動市長室ということで、山家岩戸神楽保

存会においでいただき、まことにありがとうございます。私たちの保存会は、全員で15名ほどでございますけれども、本日は勤務の都合などで出席できない者もあり、ごんまりとした会になりましたことを申し訳なく思っているところでもあります。

詳しい話は後ほどいたしますが、約500年近い歴史のある神楽ということで、筑紫野市無形民俗文化財に指定をいただいております。毎年10月17日には、山家宝満宮におきまして奉納いたしております。これが万年願と言われて必ず奉納しなくちゃならない。私の記憶にあるのが、台風が接近して雨風でお客さん誰一人いないのに奉納したという記憶もございます。

また、今日は、筑山中学校を卒業したばかりのぴかぴかのお二人が見えておりますけれども、彼女たちも山家小学校に神楽クラブができて、卒業して中学生になっても毎年来ていただいて、出演もしてもらえますし、小学生の指導もしてもらっております。その子どもたちの指導には、鶴崎会員が中心となられまして小学校に指導もしております。その活動に対し、昨年2月には福岡県青少年健全育成対策推進本部長顕彰で、小川知事より表彰も受けたところでございます。

元教育長の高嶋先生が会長をされております筑紫野市文化学芸連盟という会にも所属いたしております。また、平成24年にありました、市制40周年、長崎街道開通400年にも、記念行事から始まりまして、筑紫野市文化学芸連盟主催の山家芸術祭にも参加をいたしているところでもあります。

このような経緯の中で、地元山家地区で根づいてきた団体として、今後とも頑張っていきたいと思っております。本日はおいでいただきまして、まことにありがとうございます。楽しい時間が過ぎればと思っておりますので、よろしく申し上げます。

○（事務局） ありがとうございます。ここで、本日の参加者の自己紹介を行ってまいります。まず、市のほうから行います。私は本日の司会進行を務めます秘書広報課の杉村です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○（文化情報発信課長） 皆さん、こんにちは。文化財を所管しております文化情報発信課で課長を務めております宮原です。本日はよろしくお願いいたします。

○（文化情報発信課） 筑紫野市教育委員会で博物館史跡整備担当係長兼文化財担当係長を仰せつかっております小鹿野です。

○（秘書広報課） 移動市長室を所管しております秘書広報課広報広聴担当係長の山崎です。

○（秘書広報課） 秘書広報課広報広聴担当の末吉です。

- （秘書広報課） 秘書広報課秘書担当係長の森田です。
- （事務局） 続きまして、保存会の皆様にもお願いいたします。
- （森木会長） 森木と申します。どうぞよろしく。
- （松原静雄会員） 松原でございます。よろしくお願いいたします。
- （木村会員） 木村です。よろしくお願いいたします。
- （小山田会員） 小山田と申します。よろしくお願い致します。
- （鶴崎弘司会員） 鶴崎といいます。よろしくお願い致します。
- （森木和生会員） 森木と申します。よろしくお願い致します。
- （砥綿会員） 砥綿と申します。よろしくお願い致します。
- （鶴崎智司会員） 鶴崎と申します。よろしくお願い致します。
- （森木優衣会員） 森木優衣です。よろしくお願い致します。
- （松原知里会員） 松原です。よろしくお願い致します。
- （安武会長） お声がかかったわけではございませんけど、市長がお見えになるということで、お迎えしたいなという気持ちで自分勝手に参加させていただきました。どうも恐れ入ります。そして、また、この歴史ある保存会のお話も聞かせていただければと思って参加させていただいておりますので、ひとつよろしく。どうもありがとうございます。
- （事務局） ありがとうございます。続きまして、活動報告に移ります。まず初めに山家岩戸神楽についての6分ほどのDVDがございますので、そちらを皆さんと一緒に拝見したいと思います。その後、鶴崎会員のほうから、パワーポイントを用いた活動報告をしていただきたいと思います。よろしくお願い致します。

＜DVD視聴＞

- （鶴崎弘司会員） それでは、私から山家岩戸神楽保存会の成り立ちと現在の活動状況等について報告したいと思います。よろしくお願い致します。

山家岩戸神楽保存会、山家岩戸神楽の成り立ちとしましては、弘治3年、1557年ごろには奉納されていたという記録があるそうです。自分も見たことがないのでわかりませんが、その記録に基づいて、自分たちは470年ほど前から奉納されていたということで意識を持っているところです。

もともとは、社家神楽といいますか、神官だけの神楽として伝わっていたのではないかと考えております。山家で神楽が起こったというのではなく、筑紫地区の神官が集まって各地を回っていたのではないかとというふうに考えております。

なぜかといいますと、那珂川町にも岩戸神楽があるわけですが、命割、演目ですね。命割とか、せりふとか、全く一緒ではありませんが、似たところがあるということで、もともとと同じ神楽が地域、地域で舞われていたのではないかなと考えているところです。

その後、明治前後ではないかと思いますが、神官が神楽を回っていくというのも難しいということで、その地域、ここで言えば山家と那珂川のほうに、その地域の人たちが自分たちで守っていこうということで、現在、山家と那珂川に神楽が残っているという状況ではないかなというふうに考えているところです。

山家においては、お宮を守っていた宮座がその神楽を伝承して、山家岩戸神楽社という組織を組織して、その家系、その家族たちが代々神楽を継承するというふうに思っております。先ほど松原先生の挨拶にもありましたけれども、万年願、何があっても10月17日に奉納するんだという思いの中で、国家安泰あるいは五穀豊穰というところで、祈願あるいは感謝という気持ちで奉納を続けてきました。

ちなみに、那珂川町のほうは7月14日に奉納されているわけですが、これは祇園祭の時期ですけれども、この時期のお祭りについては無病息災、ちょうど伝染病とかはやる時期ではあったと思います。無病息災ということで、お祭りの中でそういう祈願の奉納がされていたのではないかなというふうに考えているところです。

その後、戦中戦後、継承者の高齢化あるいは後継者不足等で、継承が難しいという時期もあったようです。が、何とか神楽社として、後継者不足とか、そういう部分もありましたけれども、何とか続いてきているところです。

そのきっかけとなりましたのが、昭和49年、能面師の森 如野さん、この方からの神楽面の奉納があった頃です。自分が中学校のときだったのですけれども覚えておまして、立派な、今、使っている面の奉納だったわけですが、それがきっかけで続けられないという思いで、現在に至っているのではないかなというように思っているところです。そのときの新聞の記事です。12面、奉納があったところですが、後ろの方にもその一部を展示してもらっております。この立派な面が奉納されて、それをきっかけに神楽社の面々、頑張ってきたのかなと考えているところです。

その2年後になりますけれども、筑紫野市無形民俗文化財のほうに指定をされております。そのときの神楽社の社員としまして13名ということで、そのときから森木さんはおられるのではないかなという気がするのですけれども、今、映っているのがそのときの第1号の文化財認定書として、これは、今日来られている小山田さんのお父さんのですが、

小山田さんが持ってあった認定書の写真です。木村さんもこのとき受けた認定書を、今、後ろの方に展示をさせてもらっているところです。

その後、なかなかやはり高齢化という問題等もありまして、昭和52年に新規加入者を募るとありますが、ただ、先ほど言いましたように宮座の中で連綿とつないできたというのがありまして、その宮座の中で若手は全部声をかけて入れようというような動きがありまして、その中から、たしか木村さんたちにも声がかかって入っていただいたのかなというふうに思っております。そのとき、多分、2、3人、新たに入られたかなというふうに私も記憶しておるところです。

昭和55年には、筑紫野市から文化功労団体表彰をもらったところです。このときも新聞の記事になりました。これも先ほど言いました森 如野さんらの面の奉納がきっかけで、盛り上がりを見せたのかなというふうに考えているところです。

昭和58年、改めて新規加入者を募って、新旧交代の時期を迎えるとしておりますが、ちょうど僕が入ったところかなと思っております。たしか松原さんも一緒だったのかなと思いますが、このころ2、3人新たに加入者ができまして、社員数16名ということで、そんなに変わってないのですけれども、新旧交代の時期になったのかなと考えております。

次に、平成3年、台風17号、19号の被害で神楽殿が傾く。この台風はもう皆さん御存じだと思いますけれども、朝倉地区のほうでブルーシートで覆われたというひどい台風でしたけれども、山家宝満宮神楽殿も傾きました。その年は当然しました。ちょうど10月、神楽前の台風だったので、どっちにしても先ほど言った万年願、神楽はしなきやいけないということで傾いたまま行いました。

このときに、筑紫野市と、そのときは山家の開発委員会という組織がありましたけれども、どうしたものかなということで、支援をいただきまして、神楽殿の改築に至ったわけです。当然、一任意団体が補助金をもらおうというのもどうか、宗教的なものとして補助金を出すのはどうかという話もありまして、改めて保存会というものを組織し直し、山家全体として神楽を継承していくんだというところでやっついこうということで、その難を免れていったというところです。

その後、平成に入りまして、平成14年ごろかなと思っておりますが、山家小学校には、常々神楽の勉強はあったわけですからけれども、創作神楽。そのころはまだ、今、子どもたちがしている神楽を継承していくという話じゃなくて、子どもたちが自分たちの神楽をつくらうという学習をしていまして、その中の指導を行って行っていました。

大きく森木さんが映っておりますけれども、学校が海外の学校との交流をしていくという取り組みの中で、山家には神楽があるよということを、交流する学校に知らせていこうということで、神楽の指導をしてまいっております。本物の神楽の道具を使うことはできませんので、ビニール袋を加工したり、段ボールで刀をつくったりとか、そういう工夫をしながら、創作神楽をつくっていったというふうに記憶をしております。

平成17年、そのときの安永校長から、学校で神楽クラブをつくるから指導に來いというような話がありまして、わざわざつくってくれるということですので、そのときは学校の指導というので、伝承とかそういうことを全く考えずに、ある程度形になればいいかなというふうに思っていたところですが、その中にセンスがいい子どもがおりまして、これは本番の神楽で舞わせてみたいというような思いが生まれて、そのときの保存会のメンバーにどうしましょうというような話をしたところでした。

なぜかといいますと、まず、本番の神楽に子どもを出すことはどうなのかということと、保存会のメンバーって全部男性です。神楽に女性を出していいのかというような話もしたところですが、皆さん、心優しく、いいんじゃないということで、初めて10月17日の本番神楽に子どもを出す、かつ女の子を出すということで、新たな取り組みが始まりました。そのときの記事が西日本新聞に掲載されたところでした。そのときは、まだしっかきできる子は1人しかいませんでしたので、これは神供という神楽なのですが、一人舞の神楽を奉納していただきました。

それから、毎年10月17日に、クラブの子どもたちを奉納させるということで、取り組みが続いているところです。平成17年からしておりますので、もう13年、この取り組みが続いているところです。

今、山家小学校の児童は、10月17日の本番、この日に全員見に来ます。だから、そういうところで奉納する、代表して舞ってもらおうということで、非常にクラブに入りたいという児童も多い、人気があるというふうに聞いているところです。

学校のクラブというのが、月に1回から2回、年間で12、3回ぐらいしかありませんので、実際5月か6月ぐらいからクラブが始まって、10月の本番に全然間に合わないということで、やっぱり所作、動きをしっかりしたものにしないと、逆に恥ずかしい思いをさせてしまうということで、10月に入って大人が練習を始めるのですが、そのときに夜、子どもたちも来てもらって、しっかりと舞えるように訓練をしているところです。

あと、山家小学校については、クラブもそうですし、神楽のゲストティーチャーとして

行かせてもらっているのですけれども、それ以外にも、最初は、吉木小学校のほうに講師として来てくれということで、ゲストティーチャーを始めました。そのきっかけは、山家小学校にいた先生が吉木小学校に転任されまして、吉木小にも教えに来られないかということで、平成20年からゲストティーチャーとしての指導が始まったところです。

また、平成26年度から、長崎街道筑前六宿子どもサミットを、北九州市、飯塚市、筑紫野市合同で開催したところです。その六宿の地域にある小学校、山家宿で言えば山家小学校が、その代表として文化の発表を行っているところです。山家小学校については、地域にある山家岩戸神楽の紹介というところで発表しておりますので、保存会のほうも当然協力という形で参加をさせてもらっています。

そのときの様子ですけれども、会場は北九州市八幡西区の木屋瀬宿で、筑前六宿の各小学校6校が集まって、お互いの文化を発表し合うということで行っております。1回目のときの新聞記事、内野小学校の発表が写っているのですけれども、こういう子どもサミットの記事も出されたところです。

今年度、行われた分ですけれども、右側が、冊子をつくって子どもサミットの紹介ということでしております。左側が、神楽と他に文化の紹介、歴史の紹介ということで発表をしているところです。

また、先ほど、松原さんからの話もありましたけれども、平成24年から26年につきましては、長崎街道筑前六宿開通400年記念事業ということで、北九州市、飯塚市、筑紫野市の連携で、記念事業を行ったわけですけれども、その中での神楽の出演依頼等がありまして、そういうところに積極的に参加をしているところです。

また、平成28年度、これも松原さんのほうから紹介がありました福岡県青少年健全育成対策推進本部長顕彰受賞ということで、この写真につきましては、その報告を市長のほうにさせてもらったときの写真です。福岡県から子どもたちに神楽の指導をするとか、そういうことを認められて表彰を受けたところです。

また、保存会の年間行事としまして、最初に、当然ながら10月17日の山家岩戸神楽奉納ということで、これをメインに動いています。先ほど言いましたように、10月1日から練習を開始しまして、当然働いている者もおりますので、練習時間は7時から9時半ぐらいまで、練習を毎日行いまして10月17日に向ける。ただ、最近は、先ほど言いましたように、子どもたちの指導のほうに時間を費やして取り組んでいるところです。

また、7月下旬には、先ほど言いました筑前六宿子どもサミット、本年度も計画されて

おりますけれども、そちらのほうへの協力、また、11月3日の山家地区文化祭がありますので、そちらへの出演を行っております。

その他といたしまして、先ほど言いました山家小学校の山家岩戸神楽クラブへの指導、また、市内小学校へのゲストティーチャーなどを行っております。

また、神社関係とか、市役所とか、公的な機関からの出演依頼があったときには、これは、会員全員の合議制で出演していかどうかというのを決めさせてもらっているところです。当然、メンバーがそろわないと、出たくても出られないという状況がありますし、自分たちの考えで、営利目的の団体のほうには出演しないというようなことを決めておりまして、皆さんが出ようとなったときに、初めて出張出演をしているところです。

神楽奉納の風景、これは子どもたちがメインですけれども、本番10月17日の神楽奉納で出演をしているところです。これは観客の状況です。前半分は山家小学校の子どもたちということで、観客の半分は小学生だなというふうに思っているところです。

これは、昨年11月3日、文化の日の山家地区市民文化祭への出演の状況です。

また、小学校の山家岩戸神楽クラブ、年度末の小学校の学習発表会のほうにも発表を行っておりますので、そのときの協力も行っているところです。

神楽クラブの指導風景です。平成29年度については5年生1人、4年生3人ということで指導を行ってまいりました。この4人のうち、保存会の会員の子どもあるいは孫ということで入っておりますので、この子どもたちが大きくなって、また保存会に入ってくれたらなと思っているところです。

各市内小学校へのゲストティーチャーということで、平成29年度については5校を訪問させてもらいました。山家小学校はもちろんのこと、吉木小学校、二日市小学校、二日市東小学校、筑紫小学校に出向きまして、神楽とはどういうものかということで、長い伝統文化がどのようにつながってきたのかというところで指導に行っているところです。あと、行ったことがあるのは、阿志岐小学校、原田小学校。依頼があったときには、出向かせてもらっております。

これはゲストティーチャーで吉木小学校に行ったときの場面です。やっぱり道具とか、非常に興味を示されたかなというふうに思っています。質問もいっぱい出ました。2コマ、1時間半のゲストティーチャーなのですけれども、もう半分を質問の時間にとりまして、いろんな質問を受けているところです。

山家岩戸神楽保存会の活動については、年間を通していろんな活動をしなが、市民、

あるいは子どもたちへの周知活動といたしますか、地域にはこういう祭りがあるよということで教えているところです。以上です。

○（事務局） ありがとうございます。鶴崎さんのほうから詳しい御説明をありがとうございました。保存会の皆様が山家にしっかりと根づいて、長きにわたる伝統を守り続けておられるということがよくわかりました。本当にありがとうございました。また、後進の育成として子どもたち、山家小学校や、そして若い人たちへも少しずつ広めていきたいという、その活動がやはり神楽を通じて、人と人とをつなぐ、地域と地域をつなぐ、地域の人と人をつなぐ営みであるというふうに感じたところでございます。

ここからは、もう少し先ほどの報告をもとにしながら、保存会にかかわる皆さんの思いを伺っていきたいというふうに思っております。よろしく申し上げます。

最初に、今日、中学生の森木さんと松原さんに参加していただいています。ありがとうございます。お二人は神楽クラブに入ろうと思ったきっかけというのはどんなところからだったのでしょうか、教えてください。

○（森木優衣会員） 私が神楽クラブに入ろうと思ったきっかけは、父と祖父が神楽の保存会に入っていたので、私も神楽を舞ってみたいと思ったからクラブに入りました。

○（松原知里会員） 小学校のころから神楽クラブに入って、周りの中学生は岩戸神楽を舞ったことがないので、そういう地域の文化を私もやってみたいと思ったからです。

○（事務局） ありがとうございます。神楽のいいところとか、好きなのところはありますか。

○（森木優衣会員） 私の神楽の好きなのところは、神楽を舞った後に舞台からおりと、家族や地域の方から上手だったねなど、とても褒めてもらえるので、とてもうれしい気持ちになります。

○（松原知里会員） 私は、先ほども言ったように、周りの人が知らないことをできるので、とてもすばらしいと思います。

○（事務局） 大人の方たちと一緒に活動をするのはどうですか。大変だったでしょう、夜も練習に。

○（森木優衣会員） 夜の練習は塾とかの後だったりして大変だったけど、練習に行くと大人の皆さんが優しく指導してくれて、とても楽しかったです。

○（松原知里会員） 大人の皆さんとすることで、学ぶこともたくさんあるし、小学生の指導をすることで、自分のためになることもたくさんあったので、よかったと思います。

○（事務局） 高校生になっても続けていけますか。どうですか。そこは今から話し合っ

て、ぜひこれからも続けてほしいなと思います。ありがとうございます。

今日は、若い世代の方も、次の保存会を担っていくような方にも参加していただいていますので、お話を伺っていきたいと思います。皆さんからも何かありましたら、それぞれ質問していただいてもよろしいかなと思います。保存会の活動をしていて楽しかったこととか、よかったことなど、何か具体的なお話があったら、ぜひお伺いしたいと思います。砥綿さん、どうでしょうか。今日はお父様がちょっと欠席ですが。

○（砥綿会員） 私は、神楽保存会に入らせていただいて10年ぐらいになりまして、若手と言われていますが、今年40になりまして、やはり一番は親がやっていたというのがそうですけど、何となく見ていて、もちろん山家に住んでおりますので知ってはいたのですが、なかなかしてはなかったのですが、今、かかわらせてもらって、やっぱりこういう歴史がある、すごい神楽というものを、中に入れてみて、やっと、より深く知って、さらに今もまだまだ知らないことがたくさんありまして、本当に勉強させてもらって、毎年毎年勉強させてもらっているような感じです。

やっぱり楽しさというのは、先ほど中学生も言われたように、舞ったとき、あと見ていただいたとき、終わったときも、もちろんそうですけど、地域の方、年配の方からやっぱり声をかけていただくようなことが多くて、そこでまたつながりを感じることができるというところが、すごくうれしいなと思っています。

○（事務局） 苦労話とか、困ったこととかありますか。

○（砥綿会員） 苦労は、最初はやはり、初めて入らせていただいたときに、基本の舞というのがあるのですけれども、それをまず覚えるところから始めたのですが、やはり一番最初はもう何もわからずに見よう見まねで、手取り足取り本当にしっかり教えていただいて、1年目は正直もう必死で余り覚えてないのですよね、そのやった後というのは。

それを何年かさせていただいて、少し余裕が出てきたときに、やっぱり動きの舞の中の所作だったり、さらに奥深さというのが、まだまだいろんな形があるんだなというのを教えていただいたりとかして、そういうことによってまた何かさらに神楽のよさというか、楽しさというのを感じることができているように今は思っています。まだまだ何もできませんけれども。

○（事務局） 所作とかは難しいですか、覚えるのは。

○（砥綿会員） そうですね。鬼の荒々しさをあらわすのとかをやられてあるのを見て、私は全くできませんけれども、ちょっとした動きでやっぱり怖く見えるとか、そういう話を

やはり練習を終わった後とか、練習の中で会話されているのを聞いて、ああ、すごいなどいうのを感じております。

○（事務局） 鶴崎さんも続けられてどれくらいになりますか。

○（鶴崎智司会員） 今年から参加しました。1回、小学生のときに、自分も神楽クラブで、奉納させていただいて、そこからもう中学校、高校は部活を熱心にしていましたので、全く目もくれず、大学に入り、もう成人したということで、父親から、そろそろ1回出てみないかって感じで、しました。

○（事務局） この前の10月の奉納が初めて。

○（鶴崎智司会員） はい。

○（事務局） 難しかったですか。

○（鶴崎智司会員） 何か見ていた記憶とか、その雰囲気とか、大体こんな感じなのだろうなというのはやっぱりあって、他の人よりは覚えるまでは早かったかもしれないのですが、先ほど言ったように、ただすればいいんじゃないかと、こうやればうまく見えるとか、そういうことまで全く自分の体が追いつかなくて、そういうところはやっぱり長く続けていかないと出ないところなのだろうなと思いつつ、今年はやりました。

○（事務局） 友だちとかにも広めていきたいという思いはありますか。同じ山家に住んでいる同級生などはいらっしゃるのですか。

○（鶴崎智司会員） いや、もう。

○（事務局） 大体出て行って。

○（鶴崎智司会員） 自分が今、大学3年で、今年就職する人とか、自分と同じ4年間終わって就職する人とか、これから出ていく人もですけど、みんな神楽のことは知っていると思うのですが、自分みたいに身内がやっているとかじゃないと、やってみようという気持ちまではないと思うから、せめて山家からよそに出ていったときにも、山家がどんなところだったかと聞かれたときに神楽があるとか、自分の友だちがそれを続けているとか、そういうぐらいの認識は持ってもらえるようにはなったら、うれしいなという感じです。

○（事務局） そうですね。小学校からそんなふうに育っているから、きっちりその芽はやっぱり山家に住んでいるお友だちにはあるのじゃないかなと、他の地域になかなかないものが、ここにはあるからですね。そういう気持ちを大切にしてもらいたいと思います。

砥綿さんも、同じ世代の方もいらっしゃると思いますけれども、伝えていきたいという思いはありますか。

- （砥綿会員） 山家にやはりこういった神楽があるっていうのも、うちの子どもにももちろん伝えていきたいと思っていますし、また、子どもも私が言わなくても、実は先ほど映っていたのですが、神楽クラブに入ってくれて、一緒にやらせてもらってとかもありますし、あとは小学校や親としてかかわっていく上で、地域のお父さん、お母さんたちにも、山家にこういうのがあるんだよというのをしっかりアピールできればなと思っています。
- （事務局） ぜひ今後もお願いしたいというふうに思います。ありがとうございました。
森木さんに伺っていききたいと思いますが、さっき皆さんにお伺いしましたがけれども、地域のきずなが感じられるというような、全体を通してそういう出来事とか、エピソードとかがあったら教えていただきたいなと思います。
- （森木和生会員） 先ほど、ちょっと出ていたと思うのですが、やっぱり神楽を舞った後とか、舞っている最中に、観客席のほうで、誰さんの御主人よとか、誰さんの息子さんよとかいう話を聞くと、やっぱり地域で根づいている神楽だなと、そういうときはやっぱりつついいうれしいなという気になります。これからもそういったつながりでやっていったらいいなと思います。
現実的に、今、認知度が広がって、カメラ、ビデオのクラブの方とかが結構撮りに来られてあるのですが、ただ、ちょっと地元の方が、昔来られていたおじいさんやおばあさんが来られなくなった方もいらっしゃるなと思って、やっぱり地元の方がたくさん、今後たくさん来られればいいかなと思って、舞っていききたいと思います。
- （事務局） 森木さんも舞をされるのですか。
- （森木和生会員） そうですね、最近ちょっとふらふらしましたので、笛のほうをしています、できる限り舞っていききたいと思っています。
- （藤田市長） 小山田さんは舞ってあるんですか。笛ですか。
- （小山田会員） 以前は舞っていましたが、最近はもう笛と太鼓です。
- （藤田市長） なるほど。木村さんは。
- （木村会員） 私も同様、笛がほとんどです。最初から最後まで座りっ放しで。
- （森木会長） 笛は、この人たちがいないと、笛吹かれない、鳴らない。なので、もう舞うのはやめて、笛だけお願いします。
- （藤田市長） ああ、なるほど。それぞれの得意技があるわけですね。
- （森木会長） はい。私が入ったときなんか、4、5人しかいなかった。
- （藤田市長） ほう。

○（森木会長） 5、6年ばかり、4、5人で、木村さんが子どものとき入ってあった。一時仕事で大阪のほうへ行ってあって、その間、1年か2年か苦労しましたよ。もう舞うのもいない、笛を吹くのもいないで。それでも、どうにか何とか舞ってきた。そういうことがあったですね。

○（藤田市長） なるほどですね。

○（森木会長） 何年か続きました。今こうして多いけど、私が入ったときは少なかった。

○（木村会員） 昔は、7番くらいしか、舞うことができなかった。それが、やっときさ、今、13番舞えるようになりましたですね。やっぱり座員さん増えたし、若い人も増えて、じゃあこれもやっていこうということで、やっときさ13番。

○（藤田市長） 18番まであるのでしょうか。

○（木村会員） はい。

○（森木会長） 学的には、33番やろ。

○（藤田市長） ああ、そうですか。

○（森木会長） 高千穂と一緒に。何にもない。舞い方というのがないから、もう上の人たちの舞ってあるのを見て覚える。今はもう鶴崎さんが指導してくれるしね、ちゃんとしたのを。私たちのときは、こう舞った、ああ間違ってたなあと言って、4人か3人で話し合っ、真ん中に立って練習し直したり、そういうこともあったですね。

大体私が、これに入った後も、宮座という御座があります、今も。その会員で、会員だから続けなきゃいけないから、さっち入ってくれ、だったんです。で、入った。割と飲むことも多いし、多いものだから、つい今までになっている。早くやめないといけないけど、何かやめられないことがあるんでしょうな。

○（松原静雄会員） 昔は、7時ぐらいまで練習して、1時間ぐらい飲んで帰りよったですね。それが楽しかったですね。いろいろ話をして、百姓の話から何から。

○（森木会長） 飲むのが楽しみやった。

○（松原静雄会員） 漬物持ってきたり、何かかんか、つまみにしてね。

○（事務局） もう、森木会長も、神楽は自分の一部みたいなものでしょう。

○（森木会長） ああ、そんなふうでしょうね、はっきりはわからんけど。

○（松原静雄会員） 絶対出てきてくれますもんね。練習に必ず出てきてくれる。

○（森木会長） 飲むのが好いとうっちゃん。

○（事務局） やっぱり10月17日までは、ずっと練習されるのですよね、詰められて。

○（松原静雄会員） 御座ってというのは、10月1日は、しめ縄でしょう。それからずっと明日から練習しますよとか。最近は小学生がいるので、なるべく早い時間は小学生に教える。最後のちょこつとを教えて。

うれしいものですね。神楽の練習を始めたら、近辺の人が、太鼓とか笛が聞こえるんですね。「また練習が始まった、そんな季節かな」ってそういうことを会ったときに、「昨日、練習しよったっちゃろう」とか、そういう話をされる。

○（事務局） 会話の1つの手段というか、もう地域にきっちりそれは根付いているから。

○（松原静雄会員） そういうね、そんな季節かなって思っ

○（事務局） そうですね。小山田さん、これからどんな岩戸神楽っていうのを目指していかれますか。

○（小山田会員） 笛を今吹いているのですが、納得のいく音色が出ないんですね。多分、死ぬまで出ない。

○（事務局） 難しい。

○（小山田会員） はい。だから、死ぬまで続けないといけないかなと思っております。

それと、小学生から80歳以上までですね、集う。一緒になって話す機会というのは、最高の集まりじゃないかなと思います。

○（藤田市長） なるほど。

○（小山田会員） それと、父、また先祖が使っていた道具を、私の手に持っているというのが、また最高なことだと思います。

○（事務局） 木村さんは、どうですか。

○（木村会員） そうですね。僕らがまだできる時代はいいのですが、やはりこの後、今、高校生になる子たちが継承していますけども、そういう若い人が増えると、これどんどん次世代に残していけるのかなという気はするのです。

今のところ、まあまだ多分できるんじゃないかと思うのですが、先々、先細りにならなけりゃいいなというふうには思います。どこでも、後継者不足というのは、やはり伝統芸能というのはですね。なかなか後継者の存在というのは、いつかはやっぱりあると思うので、できるだけやっぱり、せっかく460年続いてきているわけですから、末永く続けていけたらなと思います。

○（藤田市長） 森木さん、小学生に、そういうふうなのを見せようって思ったのは、いつごろくらいからですか。

○（森木会長） いや、教えようと思ったのは、あちら。鶴崎さんが進んでしてくれている。

○（藤田市長） いつごろから、それやったの。

○（鶴崎弘司会員） もともとは、創作神楽といますか、やっぱり地元の神楽を子どもたちに。

○（藤田市長） 伝承していこうと。

○（鶴崎弘司会員） はい。伝承していくというよりも、教えてくれたんですね。つなげようというよりも、創作神楽をつくるから、動き方とかを教えてくださいという話でした。

そうしていたのですけども、校長が学校は学習の場として、保存会は後継者育成というのでどうかというので始まったと。

○（藤田市長） そうですか。

○（鶴崎弘司会員） 最初のころは、子どもたちも初めての試みですから、たまたま入ったという感じだったのですけども、一定、そういう新聞にもあったように、みんなの前で発表するというのがやっぱり、子どもたちもびっくりといますか、僕たちも出たい、私も出たいということで、一時期は多い年は8人、10人ぐらいいたかな。

○（藤田市長） そうですか。

○（鶴崎弘司会員） はい。逆に、やっぱり教える以上、発表の場が欲しいなということで、当然、本番もありますし、文化祭、あと学習発表会で、1人最低1回は出ようねということで、教えていってですね。

○（藤田市長） やっぱり、こういうふうなのを保存していくのには、今、小山田さんもおっしゃいましたように、やっぱり若い人たちに継承していかないと、木村さんも言ったように、それがやっぱりないと続かないだろうと思いますよね。

今回は78回の移動市長室ですけど、これと別に学校の給食、今、9600食つくっているんで、それを、「皆さん、食べてどうですか」と小学校、中学校を回るのですよ。回ったときに山家小学校に行ったことがある。

そのときに、やっぱり「食べておいしかった」と言いながら、「あなたたちは今、何をやっているの」って聞いたときに、「剣道やっています」「ソフトボールやっています」

「神楽を練習しています」という子どもがいたのですよ。ほおっ神楽をねえって思って、印象に残っているのですよね。小学校の給食ですから、6、7人ですよ。一緒に食べたことがあるのですけど、それが非常に印象に残って、そのときに、はあ、ここの保存会というか、山家岩戸神楽というのは、子どもさんたちに継承するためにしてあるのだろうか

とあって、それが非常に強烈な印象に残っています。

どう、森木さんと松原さん、小学生は素直に聞く？

- （松原静雄会員） 大人が言うより聞くやろうね。
- （鶴崎弘司会員） ああ、そうですね。
- （松原静雄会員） 私たちが言うより、彼女たちが言うのと、そっちのほうが。
- （藤田市長） ああ、なるほどね。
- （松原静雄会員） 世代が近いというか。
- （藤田市長） そうですか。
- （事務局） お孫さんがされてあるから、森木会長も。
- （森木会長） 自然と足運んできている。
- （事務局） ずっと小さいころから見てきてあるから。
- （森木会長） 小学生だったら、毎年でも見に行くし、その関係もあるでしょうね。
- （藤田市長） なるほどね。
- （事務局） 自然に息子さんもそういう感じでされるようになったのですか。
- （森木和生会員） そうですね。まあ、やっぱり出てこいと言うので。小さいころ見た、あれかということで。
- （森木会長） もう神楽社だから、自分たちがせな、誰がするかってことやろ。
- （森木和生会員） 若干強制でした。
- （森木会長） そういうしきたりだった。しきたりっていうか、神楽社の中で舞いよったから。そしたら、もう1人も6年生か、5年生か。
- （森木和生会員） 弟は、今、5年生。
- （事務局） その人も神楽クラブ。
- （森木和生会員） はい、やっています。
- （森木会長） 一家総出よ。
- （松原静雄会員） 全部、親がしていますね。
- （藤田市長） なるほど、そういうわけですね。
- （森木会長） あっちも親子、こっちも親子。こっちは孫さんがね。
- （鶴崎弘司会員） 先ほどの山家小学校の風景も、ここ2人の子どもが入っていましたので、やっぱり子どもは来やすいのかなと思いますけどね。
- （藤田市長） なるほど、そうですか。いや、いいことですね。

○（事務局） もう、会長は長いですね。長く続けていただいて、何十年ってされてある。

○（森木会長） もう本当に何歳からか、今、考えよったです。

○（鶴崎弘司会員） 50年近いんじゃないかな。

○（松原静雄会員） そうね。

○（鶴崎弘司会員） 木村さんで40年。

○（木村会員） 42年くらいかな。

○（事務局） すごいですね。

○（木村会員） もうやっぱり、もう生活の一部で、毎年10月17日は会社休み。24、5のときからずっと。

○（松原静雄会員） 小学校のときも、しよった。

○（木村会員） はい。小学校のときは、昭和37、8年ごろ、親がやっぱり伝承させないといけないから、子どもたちに神楽させようということで、2年間ほど、小学校のとき舞いました。その後は、鶴崎君と同じく、中学校になったら、もうそっちのけで、仕事入るまでは、やっぱり何度も遊びほうけていましたけど、やっぱり本腰になってやらないといけないなって、やり始めて、それからもう42年。いろいろ楽しいことばかりですね。

先ほど言われました。やっぱり年代が70ぐらい違う年の差があるのですね。その中でやっぱり同じことをみんなで行っている。いろんな話をしながら、やっている。

やはり御年輩の方々から顔を覚えられて、ちょっと家来いって上がり込んで酒飲んだりとか、やっぱり地元一体型といいますか、そういうのに若いころからなじんでいましたので、非常に地域からかわいがられているということは、やっぱり非常にメリットがあったかな。それこそ、松原さんの親父さんと一緒に。

○（松原静雄会員） うちの親父、けんちゃん、けんちゃん言ってですね。僕は知らんです、誰かいなって。

○（鶴崎弘司会員） 一時期、鬼を3人、僕と木村さんと小山田さんが、違う場面で鬼の役をしていたのですが、当然、面をかぶるから、初めての人は誰が舞っているかわからないでしょうけど、手の動きで、あ、あれは誰やろとか、手の動きとか足の動きとかで、今日は誰々が舞ったっちゃろとか、そういう癖を覚えることがある。

○（木村会員） 観客の方がね、これは誰やねって。

○（鶴崎弘司会員） 実際、自分たちも写真で見てもわかるのですが、これ、誰の舞やねというのはやっぱりわかるので、本当、「今日舞ったのは、あんたやろ」とか言われるの

はうれしいなという感じ、そういうのはありますね。

- （藤田市長） やっぱり舞いながら、一人一人のやっぱり所作が違うんですね。
 - （鶴崎弘司会員） 違いますね。
 - （藤田市長） そうですか。
 - （鶴崎弘司会員） 鬼の場合は、どうやったら怖く見せられるのかというのを、そういうので、お互い意見を出しながら。
 - （藤田市長） 鶴崎ジュニアも。
 - （鶴崎智司会員） はい。頑張ります。
 - （事務局） 今度はどんどん教える側にもね。
 - （藤田市長） しかし、子どものときしていて、大学出て、木村さんが言ったように、また戻ってきて、こりゃやっぱりやらなきゃいけないという、その帰り方もだいたい似ているんだね。
 - （事務局） 安武会長に来ていただいておりますが、コメントをいただければと思います。
 - （安武会長） 先ほど映像を見させていただきながら、小山田さんのお父さんの顔を久しぶりに拝聴しました。私もちょうど50年近く山家におります。木村賢治君が、お父さんが鬼の面をかぶったら、大体、おきれいな人のところに、ぱっと水かけるということとか。それとか、近所に山田君っておりますけど、小さいころから知っているものだから、ああ、上手になったなあと思って、そういうことで何か。それと、今、皆さん言われるように、継承というのが、これは文化ですもんね。
 - （藤田市長） そうですね。
 - （安武会長） 何か誇りに思いますね。
 - （藤田市長） そうですね。
 - （安武会長） 私も山家で育ったわけじゃございませんけど、半分以上は、もう50年になるから、まだ100歳になっちゃいませんで、3分の2は、ここで育てさせていただいたわけで、いろんな形で、地域的なやっぱり誇りを感じますよね。
- ちょっと話は、ずれますけど、自分の子どもは現役のとき、職場の連中を連れてきたら、必ず山家小学校の校歌を歌わせていましたね。だから、校歌だけはよく知っております。
- ただ、そういうことで、やっぱり地域における、何と申しますか、触れ合い、和み、そういうことを、今日はいいお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。
- （事務局） ありがとうございました。皆さんのほうから神楽に対する本当に熱い思いと

いうのを聞かせていただいて、ありがとうございました。私たちも実際に見させていただくと、やっぱり身が引き締まるというか、私自身も今日は移動市長室という場でございましたけども、本当に身が引き締まる思いがしたわけでございますので、これからも、森木会長も代々継承されておられるように、ぜひなくさないで大切に続けて守ってほしいなということを、今日も皆さんのお話を聞きながら、改めて感じました。

ここからは、少し筑紫野市のほうから、施策の説明等を皆さんにさせていただきたいなというふうに思います。筑紫野市の予算を今から説明をさせていただいて、文化情報発信課の職員も来ておりますので、山家の歴史と文化についてのお話をさせていただこうと思っておりますので、御静聴よろしくお願ひしたいと思ひます。

○（秘書広報課） では、まず、予算的なお話をさせていただきます。実は、明日までの会期で、3月議会が行われております。この議会の中で、平成30年度の予算を審議いただいておりますので、30年度当初予算案という形で、今日は紹介させていただきます。

この円グラフは、一般会計歳出予算の内訳を、使う目的によって区分した円グラフです。歳出予算の中で一番大きな割合を占めているのが民生費で、子どもや高齢者、障がい者などの福祉に使われ、予算の40.3%、その額は約137億2000万円となっております。以下、総務費、衛生費、公債費、教育費、土木費、その他という中には、議会や農業、商工業、消防などに使われる予算があります。

これらの総額340億1300万円によって、10万3000人余の市民の皆さんが、安全で安心して快適に生活していけるように取り組んでいるところです。

続いて、まちづくりの方針についてということでお話をします。平成28年4月にスタートした第五次筑紫野市総合計画は、28年度から31年度を計画期間としています。将来都市像を「自然と街との共生都市 ひかり輝くふるさと ちくしの」としています。

この将来都市像実現のための5つの政策として、藤田市長の就任以来の公約でもあります「行財政改革」「産業・雇用をつくる」「生活をまもる」「共助社会づくり」「未来をつくる」、この5つを柱とし、さまざまな事業に取り組んでいます。

さらに、総合計画では、重点施策を5つ掲げて、積極的な推進を図っているところです。

まず、1つ目は、市庁舎の建設に関してです。昨年5月に起工式を行いまして、建築工事に着手しています。先日、3月12日には上棟式を行うことができました。11月末の竣工を目指しまして、誰もが利用しやすいワンストップサービスの窓口、行政サービスの拠点、防災の拠点、そして、市民の皆さんが集えるコンパクトな庁舎づくりを進めてま

います。イメージ図を載せています。庁舎棟があって、多目的棟があってという形で、下の階のほうに来庁者が多いような窓口を配置するような計画になっています。

2つ目は、高尾川・鷺田川の浸水対策です。昨年3月に、こちらも起工式を行いまして、順調に今工事が進んでいます。今年は、現地にシールドマシンが搬入され、いよいよ地下河川の掘削工事が始まります。さらに、流れを阻害していた水道橋のかけかえも行い、新しく平成橋という形で昨年9月に開通しています。今後も平成31年度の完成に向け、取り組みを進めてまいります。

3つ目、地域コミュニティづくりです。自助・共助・公助社会の実現に向けた取り組みであります。市内7つの地域でコミュニティ運営協議会が発足し、地域の課題解決に向けた活動が取り組まれています。拠点施設の整備や、市とコミュニティとのパートナーシップ協定締結など、これからも地域の皆さんとともに、新たな協働のまちづくりを推進していきたいと考えております。

4つ目は、地域交通対策です。地域公共交通網形成計画に基づき、新たな交通手段であるコミュニティバスの運行に向けた取り組みを進めていきます。カミーリヤと接続し、新市庁舎、医療・商業施設などを結ぶことを想定し、今後、地域公共交通会議での協議をしてまいります。

重点施策、最後に5つ目は、筑紫駅西口土地区画整理事業です。平成27年に前畑遺跡の土塁が発見されたことにより、協議調整に時間を要することになりましたが、土塁についての福岡県の方針も示されましたので、早期完了に向け、取り組みを進めてまいります。

さきほど、5つの政策という形で言いましたが、「未来をつくる」の中では、学校教育の充実や、歴史・文化の継承と振興などの施策を進めているところです。最初に山家小学校のプールの改築ということで、教育環境の整備を行っておりますが、安全・快適な学校施設となるよう改修工事をさせていただきました。もうすぐ完成の見込みになっています。

次に、歴史・文化の継承と振興で、ちくしの歴史・文化発信事業、予算額としましては、448万3000円です。市の歴史・文化に関する企画展、講演会などの事業費になっております。これは、過去の企画展のポスターですけども、荒振神が載っています。

次に、文化振興計画推進事業、予算額が20万8000円です。同計画のキャッチフレーズ「文化の風が吹くまち ちくしの」を具現化し、計画的・総合的に文化振興施策を推進していくための事業費です。

次に、五郎山古墳保存整備事業、予算額が3785万3000円です。五郎山古墳周辺

整備及び古墳館の再整備を行うための事業費です。

私の話の最後に、国指定史跡宝満山保存活用計画策定事業、予算額が359万3000円です。太宰府市と共同で計画を策定するための事業費です。

これらの事業などを通じ、本市の文化・歴史の振興を推進していきたいと考えています。

続きまして、文化情報発信課の小鹿野より、山家にまつわる歴史的なお話をさせていただきまして、皆さんで認識を深めていくお時間にしたいなと思っております。

○（文化情報発信課） 失礼します。本日は、山家岩戸神楽保存会の皆様、いろいろお話を伺いまして、毎年、私も拝見させていただいておるのですけれども、こういった機会でお伺いするようなことはございませんでしたので、大変勉強させていただきました。ありがとうございます。お時間を少しだけ頂戴しておりますので、歴史がつなぐ山家への道ということで、少し御説明させていただきたいと思えます。

山家におきまして、歴史的に切っても切り離せない道というのは、言うまでもなく長崎街道でございます。これはもう皆様御承知のとおりかと思えます。本年が明治維新を迎えまして150年目の節目の年ということでして、長崎街道もそのときには当然通じておりますし、現在でも通じている歴史であり、文化の道であると認識をしておるところです。

御承知のとおり、北九州小倉から長崎までをつなぐ、江戸時代の外国と唯一つながった道でございます。この道が、山家の宿場ですけれども、山家地区を抜ける縦の軸ということで認識をしております。

有名な歴史的な方々ですと、シーボルトですとか、伊能忠敬の測量隊も通っておりますし、物と情報と人を運ぶための道としてつくられた道でございます。これが山家の地域性を決定づけた縦の軸であるというふうに思っております。

地図をお出ししておりますけれども、長崎街道がちょうど山家の宿場を抜けまして、南北に伸びるラインをとっております。山家宿のちょうど南のあたりで、博多のほうから参ります二日市を経由する日田街道、それから鹿児島の方から参ります薩摩街道が、今の言葉で言いますと、ジャンクションのように集まっていると、山家宿の南側ですね。

江戸時代には、九州で一番、人の交通量が多かったというふうに伺っておりますので、非常に人の往来があった。明治維新を迎えたときに、例えば、坂本竜馬ですとか、今、NHKの大河ドラマでも西郷隆盛をやっておりますけれども、太宰府へ参られておりますので、この道を通して山家地区の場所を、地域を抜けて、人が往来しているということがわかりいただけるかと思えます。

御承知のとおり、初代代官、桐山丹波守です。黒田二十四騎の1人に数えられており、左側の写真が山家の宿場内にございます恵比寿様の石像ですが、先般、市の指定文化財、有形文化財ということで指定をさせていただいて保存しておりますけれども、ちょうどこの石碑の恵比寿様がある裏側に銘文がございまして、慶長16年、1611年の年号がございます。慶長16年というのが、要するに長崎街道冷水峠越えが開通した年であると。すなわち、山家宿の始まりの起源を示す石塔だということになりますので、市の指定文化財として保存をさせていただいております。この造立に、桐山丹波守がかかわっているということを示す石碑です。

続きまして、写真をお出ししておりますのが、宝満山です。皆様、山家岩戸神楽保存会ということで、山家宝満宮のほうで御奉納されているかと存じますけれども、宝満宮という名前を冠しておられるお宮です。宝満山とのかかわりが恐らく深いのだろうというふうに認識をしているところでもあります。神奈備型という、非常に笠形のきれいな形をした山でして、筑紫野市側から見る風景が非常に美しいです。

実は、宝満山が山家のちょうど北西方向にあるかと思っておりますけれども、宝満山というのは、修験道の山として非常に歴史的に深い山でありまして、この記事は、宝満山から山の峰々を修験道たちが集って修行しながら歩くのですね。それを英彦山まで75キロほどございますけれども、宝満山の開山1350年という節目の年、平成25年度なのでございますけれども、復興されたと。150年ぶりと伺っておりますけれども、そのときの記事です。

こういった形で、絵巻物に残っているのですけれども、修験者たちが山の峰々を通じて修行して回るというような情景です。

こちらのほうに地図を持ってきておりますが、宝満山がこちらにございます。宝満山から米ノ山を越えまして、秋月のほう、古処山とか、馬見山、ずっと越えまして、英彦山までたどるルートがございます。これが秋のルートになるのですが、春のルートは宗像のほうまで、ぐるっと周回するようなルートですけれども、ちょうど山家があるのは、この場所に当たります。

先ほど申しました長崎街道は南北の軸で例えるとしますと、宝満山の修験道にかかわるような信仰の道、すなわち心の道だと思いますが、そういったものは山家の東西にあって、そしてその麓に山家宝満宮が、というような、まさに、物と心と信仰とのクロスロードに当たる場所が山家であるというふうに、私どもは考えておるところです。

修行のときに、こういった修験者たちが崖をたどりながら、修行をして回っているとい

うことに同行させていただいたのですけれども、まさに山の上から見ておりますと、山家がきれいに見えました。山家の、その神楽を舞っておられる歴史の重みというのを、今いろいろお伺いしたところですが、そういったような情景、江戸時代の400年以上続く、その風景というのが、私の脳裏に思い描いたところです。

ちなみに、右側の方が山家の円通院様の御住職です。ほら貝の名手でございます。

現在、私どもの筑紫野市歴史博物館では、このときの写真をずっと撮っておりまして、記録をとりましたものですから、この写真展をやっております。今週末までになっておりますので、ぜひご覧いただければと存じます。

最後に、無形民俗文化財、山家岩戸神楽、言うまでもございませんが、筑紫野市の文化財として指定をさせていただいておりますが、地域とどのようにかかわるかということ、少しだけお時間を頂戴したいと思います。

平成25年に宮城県の山元町という町に震災の復興支援で、私、派遣をしていただきまして支援をしてまいったところですが、地域の歴史文化というものに、津波で流された、これ宮城県の海岸部なのですから、無形民俗文化財がどうかかわっているかということとを少し述べさせていただきます。

この辺の映像は御承知のとおりだと思いますけれども、津波によって家屋が流されて、仮住まいをされてという状況で、多くの方がお亡くなりになりました。先日の3月11日で7年目ということですが、このときに国のほうで閣議決定をされていて、要点だけ述べますが、地域のコミュニティの再構築というもので、仮設住まいになって、地域の村がもう解体されてしまって、その人たちが心の再生、物の再生はもちろんですけれども、心の再生をするということになったときに、地域のアイデンティティーを認識したというのが、実は、ここに出ております文化的な活動、芸術的な活動、そういったものが非常に大きな影響を及ぼしたというふうに言われてございます。

1つの事例を御紹介しますと、福島原発の北のほうにあるまちですが、相馬市というまちがございまして。これは実は有名な国指定の無形民俗文化財、相馬野馬追というのがございまして。テレビにも時々出るのでございますけれども、武者の格好をして馬を駆って奉納するというような伝統行事ですが、実は、この相馬市の馬追をやっている地域が被災をしまして、津波で流されて、ばらばらに仮住まいをされているというような状況であったのですが、震災発生したその直後の4カ月後に、別のお宮を借りて、この祭りを催行したというようなことを伺っているところです。

すなわち、言いかえれば、祭りというのが、地域の生きる場であって、今、会員の方々、いろいろお伺いしたところでございますけれども、生きる支えになっている。町が、村がなくなってしまったところで、自分たちがどういうふうに地域を復興していこうかということを考えてきたときに、こういった伝統行事をまず先に復興したというのは、非常なる驚きでして、私どももそのことは身にしみてといいますか、肝に銘じて考えていかなければいけないというふうに思っております。

山家岩戸神楽でございますが、今、申しましたような、地域と無形民俗文化財というものを考えたときに、この岩戸神楽というのを私たちがどのように受けとめて、市としてもどのように考えていかなければいけないのか、勉強させていただきたいと思っておりますし、無形民俗文化財は、すなわち地域であるということを一生涯懸命考えてまいりたいというふうに思っております。

かたい話を申し訳ございませんでした。ありがとうございます。

○（事務局） 御清聴ありがとうございます。所管の宮原課長も出席しておりますので、文化情報発信課長のほうからもメッセージがございましたら、よろしく願います。

○（文化情報発信課長） 本日はいろいろと長い経過、昭和から今まで、非常に苦勞された時代もあったかなと思って、聞かせていただきました。そして、こういった活動が、地域にとってつながりになって、いろいろ伝承する重要な活動ということが、改めて認識させていただいたところです。

この市の文化財は、指定の無形民俗文化財ということで、地域の宝であるかと思えますけど、市としても宝です。今後、先ほどの中でも、地域外でもいろんな場面で伝えていきたいというお話も聞いておりますが、自分たちも、そういったことに御協力できるように大事に大切にやっていきたいと思っておりますので、何かありましたら、文化財として指定していますので、御相談いただけたらと思っております。今後とも保存会活動をよろしく願います。ありがとうございます。

○（事務局） 結びに、藤田市長が皆様にお礼の御挨拶をさせていただきたいと思えます。

○（藤田市長） 今日は、貴重な時間をとっていただいて、78回になる移動市長室をこのように開催ができ、そして、その内容たるや、非常に歴史・文化を地元で保存しながら、守り続けて、そして後世に継承していく。そういう努力が皆さんの心の中にしっかりと根づき、育ててきていただいている。その様子がわからせていただいたということが、市としての無形民俗文化財という形はっておりますけれども、市、行政として、そこら辺の

理解がまだまだ足らなかったというようなことを思い知らされた気がします。

特に、うちの小鹿野が今、話をしましたように、長崎街道といたら、南北に縦の線で結ばれていると。歴史や文化、いろんなその足跡を南北でつくり上げた、そういう印象しかありませんでしたけど、今の話にありましたように、宝満宮という、その意味合いが、南北だけではなくて、東西に、宝満山から英彦山まで、そういうふうな歴史が刻まれた中で、人、物、そして信仰という心を、山家地区には宝満宮という形でしっかりと根づかせていただいている。それが神楽になって、継承していくべき貴重な財産として残っているということを、非常に皆さん方のお話の中からも感じておりますし、今、文化情報発信課長の宮原が言いましたように、今後の行政の、地域をコミュニティという形で今、つくっておりますが、そういうコミュニティ、自治組織の中にも、そういう山家地区の大切にしている、そういうふうな歴史や思い、信仰心、そういうものを大事にさせていただきながら、行政の中に取り入れながら、筑紫野市の発展に、また山家地区の発展に結びつけていくような行政を進めていきたいと、このように思ったところであります。

今日は本当に、安武会長さん、ありがとうございます。そして、特に、森木義昭さんの長い自分の足で歩いてきた、そのことをですね、やはり節目節目に話を聞かせていただいたということ、非常にやっぱり重みがありました。やはり歴史というのは、そういうふうな先人のやっぱり足跡でつくり上げられてきたことが一番貴重なものであり、また高校生になる2人が、それを受け継いで、また後輩たちに教えていっていただくことが希望につながる、山家岩戸神楽の存続につながるものであると、このように思わせていただいたところでございます。

本当に今日は長時間にわたりまして、皆さん方の貴重な体験、経験の中から、山家に長く伝わる山家岩戸神楽の歴史や文化、思い、心、そういうことを聞かせていただいたことに心から感謝申し上げて、私のお礼の挨拶に代えさせていただきます。本日はまことにありがとうございます。

○（事務局） これをもちまして、本日の全ての日程を終了させていただきます。長時間にわたる懇談、本当にありがとうございます。